

日宋麗連鎖關係の展開

森, 克己

<https://doi.org/10.15017/2339045>

出版情報 : 史淵. 41, pp.71-101, 1949-10-10. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

日宋麗連鎖關係の展開

森

克

己

一 唐商船の來航

大陸文化の輸入と國際貿易の遂行とを使命とした遣唐使は、舒明天皇二年より承和五年に至る二百八十年間に十三回にわたつて派遣された。しかしながら何分にも遣唐使の派遣といふことは、當時の國家財政にとつては大きな負擔であり、尢大な經費を要するので、律令制を基盤とする中央集權的政治機構が次第に弛緩し解體して來ると、政府の財政もこれに伴つて漸次破綻を生じて來、従つてまた遣唐使制度の維持も年と共に困難を告げて來た。このことは、遣唐使の派遣が前期の舒明天皇より齊明天皇に至る約三十年間に四回で平均七年半に一回の割であり、天智天皇一代約十一年間に三回で、平均約四年に一回の割、また中期の文武天皇から孝謙天皇に至る約五十年間に四回派遣されたから平均十二年半に一回の割、後期の光仁天皇から仁明天皇に至る約六十年間に三回の派遣があつたから平均二十年に一回の割となる。しかも天智天皇一代は我が百濟救援軍が白村江の戰に敗れたのを契機として、半島を撤退し、一方には唐・新羅の來襲に備へて國防を

固めると共に、一方に於ては唐との國交を調整しようといふ政策をとり、そのため頻繁に使を唐や、唐の半島に於ける占領地へ派遣する必要があつたといふことを考慮して、この一代を例外とすれば、遣唐使の派遣は大體前期より中期に、中期より後期にと時代が下れば下る程間遠になつて來たといふ現象からも看取されるのである。つまりそれは、寛平六年（八九四）七月、太政官が在唐僧中璠に與へた牒狀に「遣唐使派遣のことは朝議では已に決定して居るのであるが、近年頻りに天災が續き、資材が整はない。遣唐使を派遣しようとして準備を整へてをるので、或は出發の年月が延びるであらう。故に若しも唐の大官が何故遣唐使が來ないのかと問うたなら、右の趣を述べるべし」と訓令してゐる事實によつて明かな如く、その派遣には莫大な經費を要し、従つて準備整はず派遣困難の結果、次第に間遠になつて來たものにほかならない。（菅家文章）

ところが一方三國時代以來分裂して來た大陸は、隋朝の出現によつて南北の統一がなり、唐代に入つては益々その中央集權的な機構が整ひ、國內に於ける商工業の進歩、交通の發達と相俟つて、南方諸國所謂南海方面との交通・貿易が飛躍的な發展を示し、廣州方面に來航するアラビア商人の活躍はまことに目ざましいものがあつたのである。

そしてこのアラビア商人の活躍に刺激された唐の商人達もまた自らの商船を仕立てて南海方面へ進出し、印度支那・馬來半島・ボルネオ・スマトラ・印度方面より更に進んではペルシャ灣に入り、オーマンの國のシラフ・オボラ・バストラ等の諸港にまでも入港して貿易するものあつたことは、十世紀の頃自ら東方に旅

行し、印度・馬來半島を経て廣州にも來たらしいマスウデイー (Masudi) の著した「黄金の牧場」によつても窺うことが出来るのである。(藤田豊八博士「南洋に關する支那史料につきて」劍峰遺草)

殊に九世紀末黃巢の叛亂には、唐國內の治安紊れ、廣州を陥れた賊徒の迫害に居たたまらなくなつた廣州在住のアラビヤ商人が難を避けて一時馬來半島方面へ引揚げたのに乘じ、唐の商人達がオーマンと廣州との略々中間にあるカラ一の港に至り、此處でアラビヤ商人と取引し、所謂中繼貿易を行つたので、一時アラビヤ商人の廣州を中心とする貿易は衰へ、唐商人の獨占するところとなつた。

以上のやうに唐の商船が南海貿易に進出するやうになつた結果、香料をはじめ南海の珍貨が續々輸入され、唐本國で消費しても尙ほ且つ餘剰が生ずるやうになつて來たので、南海の珍貨の餘剰や、絹・磁器その他の唐自國製品等を商船に積んで、新羅や日本の方面へ新たな販路を求めらるやうになつて來た。

ところで日本との貿易は、近隣關係といふ自然的條件よりして、はやくより新羅商人の着眼するところとなり、七世紀末頃より日羅關係が悪化して來、奈良時代末期即ち八世紀の中頃には日本側に於ては新羅遠征の計畫さへあつた程、その關係が尖鋭化したにも拘らず、九世紀の頃より新羅商人が漸くその姿を我が國に現すやうになつて來た。といふのは新羅の末期より、王位繼承問題をめぐる中央の政争激しくなり、その動搖は地方にまで波及して地方政治の紊亂を來たし、その紊亂に乗じた新羅人は或は商人として、或は海賊と化して黃海・東支那海に出沒横行したのである。例へば新羅と唐とを結ぶ海路の要衝に當る清海鎮(全羅南道海南郡南方の莞島)の大使となり、鎮海將軍に任ぜられた張弓福(張寶高)は、山東の一角にもその根柢

を有つて黄海々上一帯に活躍してをつたらしく、山東の文登縣清寧郷赤山村の赤山法花院を建立し（入唐求法巡禮行記開成四年六月七日條）また我が入唐僧円仁が開成四年（八三九）六月山東の赤山浦に到着したところ、張寶高は大唐寶物使崔兵馬司を圓仁の許に遣してこれを慰問したことゝ入唐求法巡禮行記に見えてゐる。この張寶高は承和七年（八四〇）我が國にも使を遣し、馬鞍等を献上して修交を求めてゐるのである。

（續日本後紀承和八年二月戊辰條）

また完山（全羅道）に據つて自立し、後百濟國を建てた甄萱も、一方に於ては大陸の五代の吳越國に使を遣して入貢すると共に（高麗史太祖開平三年）一方には我が國にも延喜二十二年（九二二）・延長七年（九二二）の二回にわたつて使を派遣し、舊交の復活を求めて來た。（扶桑略記）

かくて新羅人は東支那海・黃海に發展した結果、唐の揚州・明州・楚州等には新羅坊といふ新羅人居留地も出來、彼等の中には總管といふ統治者もあつて自治さへも許されてゐたらしいのである。開成四年（八三九）我が遣唐大使藤原常嗣歸朝の際には、楚州新羅坊の斡旋によつて新羅船九隻を雇つて歸朝してゐるのをはじめとして、我が入唐僧達が本國との連絡やまた歸朝の際には、楚州新羅坊の總管や譯語の斡旋を受けることが多かつたのである。（入唐求法巡禮行記）かくして弘仁五年（八一四）十月新羅商人三十一人長門國豐浦郡に漂着したといふ日本紀略の記事を初見として、以後新羅商人來航に關する史料が多くなつて來るのである。

しからは唐の商人がはじめて日本の方面に姿を現はすやうになつたのは一體何時の頃からのことであらうか、入唐求法巡禮行記開成四年（八三九）正月八日の記事によれば、入唐僧圓仁が揚州の地で逢つた新羅人

王請といふ人物は、弘仁十年（八一九）我が出羽國に漂着した唐人張覺濟等と同じ船に乗つてをつた者であつた。そして彼等は貿易のため揚州を出帆したのであるが、惡風に遭つて南流すること三ヶ月、遂に日本の出羽國に漂着したのであると語つてゐる。ところが日本側にはこの弘仁十年唐商人が出羽國に漂着したといふ史料は見出せない。しかし日本紀略にはこの翌年の弘仁十一年四月、唐人李少貞等二十人出羽國に漂着したといふ記事が載つてゐる。とすれば入唐求法巡禮行記に見えてゐる張覺濟・王請なるものはこの李少貞と同船して漂着したものであつて、日本紀略・入唐求法巡禮行記の記事のうちいづれかの年月日に間違があるか、或は語つた王請の話に記憶の誤りがあつたものと見なければならぬ。

兎も角も以上の記事よりして、この出羽國に漂着した唐商船には唐商人と恐らく當時唐に居留した新羅人達とが乗組んで貿易のため海洋に乗出したところ、たまたま逆風に遭ひ海流に乗つて押流され、遂に出羽國に漂着してしまつたものと見るべく、従つてそれは唐商船には相違ないが、最初から日本を目指して來航したものとはいへないのである。なぜかなら、それは他かに目的地を有つてゐたのに偶然日本に漂着した漂流船にほかならないからである。

しからば文献上明かに唐商船が對日貿易を目的として來航したものの初見は何時であるかといふと、それは承和八年（八四二）春入唐僧惠萐が便乗して歸朝した唐人李隣徳の船である。そしてその前年の秋惠萐が入唐の際便乗した船も、前後の模様より推して唐商船らしく思はれるのである。（入唐求法巡禮行記）この後唐の滅亡まで六十餘年間に、唐の商船の來航したものを文献から拾つて見るに三十數回を數へるのであ

る。

一方また遣唐使は律令制の崩壞過程が進むにつれてその派遣は愈々困難となり、寛平六年（八九四）唐末の内亂と新羅賊徒による海上の不安を理由とする菅原道眞の遣唐使停廢意見が奏せられるに及んで遂に名實共に廢止されるに至つたことはいふを要しない。そしてその後は専ら唐商船が遣唐使に代つて我が貴族階級の欲求する海外の珍貨を齎すやうになり、新羅海賊に對する警戒上、新羅商船の來航が我が國側に餘り歡迎されないのに乗じて、從來の新羅商船の地盤を侵蝕し、遂には對日貿易を獨占するに至つたのである。

二 中世的貿易の萌芽

かくて日唐間の交通に、唐商船や新羅商船の往來が盛んになると共に、從來は數年乃至二十數年毎の遣唐使派遣といふ少い機會を捉へて留學するに過ぎなかつた留學僧侶達は、殆ど毎年の如くに來航する外國商船によつて比較的容易に渡航留學することが出来るやうになつて來た。今唐末六十餘年間に日唐間を往來した僧侶達の便乘商船の船數を總計すると二十隻餘りにも達し、その僧侶の數も三十餘人に上るのである。

また僧侶達だけでなく、僧侶に隨行する俗人達も多かつた。たとへば貞觀四年（八六二）入唐した眞如法親王の一行は、僧俗合計六十餘人を數へてゐる。（入唐五家傳「頭陀親王入唐略記」）眞如法親王の場合の特例としても、圓仁は從僧二人・行者一人を、また圓仁の許へ書信・信物を送るために會昌六年（八四六）入唐した円仁の弟子性海も俗人四人を伴つてゐる。（入唐求法巡禮行記）更に大中七年（八五三）入唐した圓珍

も從僧三人・譯語二人・經生三人を伴つてゐる。(行歷抄)

これ等入唐僧侶達の中には、圓載の如く承和五年(八三八)より元慶元年(八七七)に至る殆ど四十年近くにもわたる長い期間唐に滞在したのも稀にはあつたが、その大多數は長くて數年間であつて、遣隋使・遣唐使時代の如く長期間にわたつて留學するといふものは殆ど見られなくなつた。その代り中には一人で二三回も日唐間を往來したのもあり、これによつて見ても、唐商船の來航は大陸との交通を頻繁且つ容易にしたことが窺はれるのである。

このやうに僧俗が多數渡航するやうになると、貿易を目的として渡航するものも現れて來る。たとへば入唐求法巡禮行記によると大中元年(八四七)六月、圓仁が明州より本國人神御井の船に乗つて歸朝しようとして企てたところ、神御井は圓仁の明州到着を待たないで、先きに日本へ向けて出發してしまつたのでこれに乗ることが出来なかつた。そして圓仁は蘇州船上唐人江長・新羅人金子白・欽良・膺金等より書狀を受け取つた。その書狀には、神一郎は張支信の船を雇ひ、春太郎は明州の船に乗つて日本へ向けて先きに出帆してしまつたと記されてゐる。この前後の記事の關係より推すと、神御井と神一郎とは同一人らしく思はれる。果してそうだとすれば、本國人神御井の船とあつても神御井の所有船といふ意味ではなく、神御井の雇つた唐商の船、即ち明州張支信の船と解すべきである。またこの春太郎は明州より廣州まで往來してゐるところより見れば、恐らくこれ等の人々は貿易を目的に入唐したものと見なければならぬ。このことは圓仁に隨つて入唐した俗人達が唐の市場に於て取引を行つてゐることからも推測されるのである。(入唐求法巡禮行記)

このやうに彼等俗人達は貿易を目的としながらも自己の船を有たず唐の商船に乗つて日唐間を往來したといふのは、要するに民間商業資本が未だ未熟だつたことと、造船・航海技術が幼稚だつたことによるものである。このことは獨り民間の場合に限らず、政府の手による貿易に於てさへ見られたのである。たとへば三代實錄によると、貞觀十六年（八七四）六月政府は伊豫權掾正六位上大神宿禰已井と豐後介正六位下多治真人安江等を唐に遣し香藥を購入させてゐる。（註）この兩人は唐の商船に乗つて渡航し、三年後の元慶元年（八七七）七月、唐商崔鐸の船に乗り、多量の貿易品を携へて歸朝した。このやうな公的資格のものまでも唐商船を利用したとすれば、他は推して知るべきである。またこの兩人が遣唐使の如く唐朝に入朝の形式をとらず、民間貿易の形式をとつて渡唐、その使命を果してゐる点は、入貢形式をとる古代貿易より中世的な民間貿易へと移行しようとする過渡的形態を示したものととして注目すべきである。

註 大三輪君の後と稱せられる大神氏からは、寶龜七年十二月大神末足が遣唐副使に、承和五年大神宗雄が遣唐使録事に任命されてゐる。また多治氏は宣化天皇の御孫多治比古王より出で、多治比真人の姓を賜はり、多治比真人廣成が遣唐大使として入唐の際、唐人にも通用するやうに多治比を丹墀と改め、歸朝の後また舊に戻つて多治比姓を用ひて來たが、天長九年多治比真人貞成等が奏請して多治比を丹墀に改めた。ところが貞觀八年二月二十一日丹墀真人貞肇が奏請して丹墀真人を多治真人と改めた。（三代實錄）以上によつて、多治比・丹墀・多治の三姓は同一姓であることは明瞭である。そこで多治氏と遣唐使との關係を眺めると、養老元年多治比縣守が遣唐押使に天平五年多治比廣成が遣唐大使に、寶龜十年多治比濱成が送唐客使判官に、承和五年丹墀高主が遣唐使録事に任命されてゐる。このやうに兩氏共祖先以來遣唐使とは深い關係を有つてをる点に興味があるし、またこうした關

係があるからこそ大神宿禰己井と多治真人安江の兩人が貞觀十六年の香藥購入の使に任命されたものでもあらう。

三 日本商船の海外進出と技術的制約

既に眺めて来たやうに、遣唐使廢絶以後は唐の商船が専ら日唐間の交通・貿易に當つてゐた。しかも中央集權的律令制度の崩壞を喰ひ止めようと努力した寛平・延喜政府は、儉約といふことを重要な政綱として取上げた。従つて貴族社會の奢侈生活を最も刺激する外國品の制限、またそれを齎す外國商船の來航に對しては二年以上を隔てて來航すべしといふ一定の制限を加へたのである。

だが寛平・延喜政府の努力にも拘らず、中央集權的機構は益々崩壞の一途を辿り、その結果として大化改新に於ける公地・公民制の原則が崩れて莊園が全國的に發生し、それ等の莊園は不輸・不課・不入の三特權を獲得して行つた。ところで從來外國船が來航すれば、これを大宰府に入港させ、その管理下に於て貿易を許可したのであるが、政府の管理下に於て取引するよりも、民間と密貿易を行ふ方が利益莫大である。そこで政府の勢力の浸透し難い、いはば治外法權的な莊園地内に船を着け、ここに於て莊園領主を相手として密貿易を行ふやうになつて來た。

一方民間との密貿易が盛んになつて來た結果、民間商業資本が蓄積され、宋の豪商の居留者や、今昔物語「鎮西貞重從者於淀買得玉語」に見えてゐる宋人より太刀十腰を質として六七千疋に當る舶來品を借りて上京し、本家の宇治殿頼通にこれを贈り、偶々在京中、その下人が淀で手に入れた眞珠一粒を宋人の希望に任

せてこれに與へて償務の代償としたといふ筑紫管崎の富豪京太夫貞重のやうな豪商も現れて來た。そしてこれ等の豪商や莊園領主達の間には從來のやうな受動的な貿易には満足せず、自ら進んで能動的貿易に乗出さうといふ意欲が湧き上つて來た。

ところで積極的貿易を行はうとする場合、先づ問題となるのは技術の優劣といふことである。大陸の商船は夙くよりアラビア商船と接觸し、季節風の利用や、殊に宋代に入ると羅針盤所謂指南針の利用法までも習得してをつたので、日本に來航する場合、殆どその大部分は明州（寧波）より直ちに東支那海を横斷して博多に達した。そして最も好ましい順風を得た時には、わづか三日三晩で明州・博多間を航海し得たやうな好記録さへ作られたのである。（安祥寺資材帳）

しかるに日本の造船術・航海術は大陸のそれとは全く比較にならない程の貧弱さであつた。

これを先づ遣唐使船の場合に就いて見るに、初期の遣唐使は博多より對馬を經、朝鮮半島の西岸沿ひに北上し、西に折れて渤海灣口を横斷し、山東半島の登州・萊州に上陸する所謂北路をとつたので比較的遭難も少かつたが、中期以後は新羅との關係が悪化したため、北路を捨て、博多より五島を經て方向を南にとり、琉球列島に沿つて南下し、轉じて大陸の揚子江口の揚州に達する航路をとつた。更に後期に入ると、五島より直ちに東支那海を横斷して揚州に達する航路、所謂南路をとつたのであるが、技術がこれに伴はなかつたため、南路をとるやうになつてからは、遣唐使船の遭難するもの非常に多く、造船技術が幼稚で大洋を航行するだけの堅牢性がなかつたため、一寸した風浪にも航行の自由を失ひ、時には船體が度二つに裂けてしま

つたことさへもあつた。殊にアラビヤや唐の商船では夙から利用してゐた季節風の存在さへも知らず、逆風の吹く季節に船出したことさへ少くなかつた。このやうな拙劣な技術によつて東支那海の荒波を突破しようといふのであるから、滲漶たる遭難を免れ得なかつたのは當然である。遣唐大使・副使が堅牢な船を奪ひ合つたり、自國の遣唐使船の脆弱性を嫌つて浪々新羅船を雇つて歸朝する大使が出たり、更には名譽なるべき遣唐使に任命されながら、渡航を嫌つて假病を使ふものが現れたりしたといふのも、つまりはこの日本の技術的拙劣さに不安を感じたからにはかならない。

尤も唐の商船が來航するやうになると、唐商船より技術を學ぶ機會が全然なかつたわけでもない。「安祥寺惠運傳」によれば、承和九年（八四二）惠運が便乘して入唐した唐人李處人の船は、李處人が肥前值嘉島に於て三ヶ月を費し、補材を以て造つたものであつたり、「頭陀親王入唐略記」によれば、貞觀四年（八六二）眞如法親王入唐の際の船は、唐人張支信が肥前松浦柏島に於て造つたものであつたといふ。このやうな場合には、恐らく我が國人が大陸の造船術を習得すべき機會があつたであらう。また眞如法親王の船の船頭は日本人であるが、船の最重要部署である舵師には張支信・金文習・任仲元といふ三人の唐人のほか建部福成・大島智丸といふ二人の日本人を加へてゐるのであり、従つて自然多少なりとも大陸の航海技術を習ふべき機會があつたものと考へられる。

しかるに遣唐使廢止後は一種の鎖國状態に入り、一般日本人の海外渡航は禁止され、犯すものは嚴重に處罰された程であるから、外國船から技術を學ぼうとする氣力も失はれてしまつたに相違ない。そしてこのや

うな状態が百數十年も續いたのであるから、日本の造船術・航海術が更に更に退歩したであらうことは想像に難くないのである。従つてこの頃になつて漸く能動的貿易の意欲を有ち、海外特に大陸へ雄飛しようと欲しても、技術これに伴はず、技術的方面よりする制約を免れなかつたのである。

その上にまた海洋の有つ特殊性から生ずる自然的制約をも無視するわけには行かない。それは即ち黃海・東支那海に流れてゐる逆轉循環回流である。これは臺灣海峡より北上し、琉球方面を過ぎ、朝鮮西海岸沖合を経て渤海に至り、更に轉じて南下し、大陸の沖合を過ぎて臺灣海峡に戻る、丁度時計の針と逆の方向に回るところの回流である。(大阪毎日新聞社編)「日本環海々流調査業績」中の和田雄治氏論文)従つて航海技術拙劣にして風浪に遭ひ、この回流に乗つてしまへば、容易にこれを離脱することが出来ず、遂に押流されてしまふのである。

ところで一般に政治的活動範圍が狭少の場合、乃至は交通技術が幼稚で従つてその交通範圍の狭少な時代に於ては、海上交通は海岸に沿つて行はれるのが原則である。その結果また貿易も沿岸貿易に限られることになる。況して幼稚な技術に加ふるに逆轉循環回流がその行手を阻んでゐるとしたら、日本商船の發展の方向は自ら決定されて來るわけである即ち如上の技術的段階と自然的條件とに制約された日本商船は、地理的近隣關係にあり、しかも逆轉循環回流に逆らはずにこれを利用し得る沿岸航海の安易なる道を選び、九州より對馬・濟州島の沖合を過ぎ、朝鮮半島の西岸に沿つて北上する昔遣唐使時代の所謂北路をとつて、先づ高麗方面へその活動を方向付け、發展して行くやうになつたのは當然の歸結といはなければならぬ。

四 日宋麗の政治的關係

しからば當時の日本と高麗との政治的關係は如何であつたか。いふまでもなく日本と半島との關係は、地理的地位の近隣關係といふ自然的條件によつて原始古代の頃より結ばれてをり、殊に南鮮は長い間大和朝廷の政治的影響の下に在り、文化的にまた經濟的に密接な關係が保たれて來たのであるが、六六三年新羅・唐の聯合軍の攻撃による百濟の滅亡、日本の半島撤退、次いで六六八年高句麗の滅亡、六七六年唐の勢力の半島驅逐によつて半島統一を完成した新羅は、從來日本に對してとつてゐた屬國的な態度を捨てて對等的な態度を示すやうになつて來た。そのため依然としてこれを屬國視する日本の因襲的な態度とは兩立せず、日羅關係は次第に險惡となり、八世紀中頃には日本側に於て新羅遠征が計畫されるまでに尖鋭化した。殊に新羅末期に入るや、王位繼承問題をめぐつて貴族の間に政權爭奪が激化し、中央政界の動搖は地方にまで及んで叛亂が起り、弓裔が自立して泰封王と稱し、甄萱また後百濟王と號し、新羅の運命旦夕に迫つた。そして地方政治紊亂の結果は新羅海賊の跳梁が我が九州海上にまでも及び、日羅關係の惡化に拍車を加へたのである。しかるに弓裔の部將王建は南海の甄萱を討伐して聲望あり、九一八年新羅を滅して高麗を興すに至つた。

(高麗史)

新に興つた高麗は日本との間の尖鋭化した關係を清算し、平和的な國交を結ばうとして屢々使節を派遣して來たのであるが、日本側では新羅に對して抱いてゐた嘗ての惡感情を仲々拭ひ去ることが出來ず、その上

また半島國家を見下さうとする根強い因襲的な觀念を去てようとしなかつたため、高麗側の熱心な希望にも拘らず、遂に公的關係の復活は見られなかつたのである。

しかしその間、彼我漂流民の送還といふ事柄を通じて多少交友的な感情も湧いて來た。殊に寛仁三年（一〇一九）の女眞賊、日本側で所謂刀伊の賊の來寇には、一時日本側は高麗側の來寇かと疑つたのであるが、女眞賊を追撃した高麗側より、女眞賊に捕へ去られた日本人のうち二百數十人だけを奪回してこれを送還して來たので、日本側の高麗に對する疑惑の念も解け、兩國の關係は次第に緩和好轉を示して來た。そして承暦四年（一〇八〇）高麗側より國王文宗の病氣治療のため日本に名醫を求めて來た際には、その問題を議する會議で高麗は「中古以來朝貢絶ゆと雖も猶略心無し」と評する程に理解を有たれるやうになつたのである。

（帥記承暦四年閏八月五日條）

次に轉じて半島と大陸との關係を見るに、王建が高麗を興すと早速大陸政府に使節を派遣し、五代の晉・周等に度々入貢した。その目的は大陸の文化を輸入し、また渤海を滅ぼして新に興つた契丹と對抗するため、大陸政府と結ぶ必要を感じたからであつた。その後間もなく五代の混亂を統一して宋が興ると、高麗はまた早速宋に入貢し、その正朔を受けた。その目的は矢張り宋と結んで契丹に當らうといふことにあつたのである。

しかるに高麗は成宗十二年（九九三）契丹が國境を越えて侵入して來たのでこれと和を求め、以後契丹の年號を用ひることになつた。また宋に救援を求めたが、契丹と新たに紛争を起すことを欲しない宋はこれに

應じなかつたので、宋麗關係は一時中絶するに至つた。

高麗史等によつて見るに、此の後の高麗の行き方は、宋とその北方の敵との間に在つて兩勢力のいづれかの下に立つて自己を保つといふ政策に終始した。即ち十一世紀の初め、契丹が再び侵略を開始した機會に宋との關係を復活し、次いでまた契丹とも和して兩國の正朔を受け、兩勢力のバランスの上に立つて自己保全に努めたのである。従つてこの政治的關係は當然また交通・貿易の上にも反映し、顯宗一代二十二年間に宋商船の高麗に來航するもの十數回、そのほかアラビア商船の來航も二回を數へたのである。

顯宗に次いで立つた德宗・靖宗の時代は、契丹との關係は一進一退を辿つたのであつたが、次に立つた文宗は、内治・外交兩面に一大改革を加へた。文宗は一〇四七年から一〇八二年に至る三十六年の長い間在位し、その一代は高麗前後を通じての全盛時代であつた。その間内政方面では法制改革、稅率・土地測量・曆法の制定を行ひ、地方官の子弟を中央に集めて人質とし、中央集權の強化を計り、對外的には先づ國境問題に就いて契丹と交渉を重ね、兩國紛争の禍根除去に努めた。また宋との關係は靖宗二年（一〇三六）進奉使を宋に遣したが途中難破したので中止となり、その後三十一年間程公的關係が絶えてゐた。しかしその間宋商人の來航は依然として續けられ、その度數は二十數回を數へたのである。しかるに文宗二十二年（一〇六八）七月宋商人黃慎が來航して宋帝の高麗との舊交復活の希望のあることを傳へ、其後再三來航してこれを促したので、二十五年三月、文宗は進奉使を宋に派遣した。

當時宋は北宋の神宗の時代であつた。神宗はその内政に於ては有名な青苗法・免行法・均輸法・市易法・

茶法等多くの税法を設けて國庫の充實を計つた。建炎以來朝野雜記（甲集十四・十五・十七）によれば、當時の歳收は六千餘万緡に達し、宋朝を通じての最高記録を示した。またこれに伴つて支出の方も膨脹し、太祖・太宗時代には、中央官吏の人件費が一ケ年間に百五十万緡に過ぎなかつたものが、神宗の元豐年間には毎月三十六万緡、従つて一年間には四百三十六万緡にも達したのである。

このやうにして神宗時代は内政的に一大發展を示したが、更にまた對外的にもこの一代は宋代を通じて最も積極的な時代であつた。即ち神宗は盛んに諸外國の入貢を勧誘し、また貿易を奨勵した。その結果この一代に新たに入貢した諸蕃は十二程を數へたのである。（玉海一五三「外夷來朝」）。高麗に對しても元豐七年（一〇八四）以來三回にわたり、自國商人を三班差使とし、圖書を託して高麗に派遣してその入貢を勧め、遂に宋麗公的關係の復活に成功したことは既に述べた如くである。そしてその目的は、遠夷を招致して太平を粉飾するといふ中國歷代王朝を一貫した傳統的政策のほかに、尙ほ高麗を自己の陣營に誘ひ入れ、腹背より契丹を挾撃しようといふ計畫があつたからである。（續資治通鑑長編元豐七年十月癸未條）

その結果宋麗關係は俄然密接となり、この後文宗卒するまでの十一年間に、高麗史・續資治通鑑長編に記されてゐるところだけでも、高麗より宋への進奉使三回、宋より高麗への訓諭使一回を數へ、殊に文宗が風痺を病んで宋朝に醫者を求めると、宋からは早速醫官を派遣し、醫藥を給し、或は慰問使を派遣する等、その存撫優恤に努めてゐるのである。従つて文宗一代三十六年間に宋商船の高麗に來航するもの三十三回を數へ、「商船絡繹、珍寶日に至る」といふ有様であつた。（高麗史文宗十二年八月條）

また文宗の第四子大覺國師義天は、宋の杭州慧因院の淨源法師と書信を交はし、遂に元豐八年（一〇八五）入宋して宋帝に謁し、宋の高僧達の門を敲き、翌年本國に歸還した。彼はまた宋より天台三觀を將來したり、大藏經の新修をも計畫し、宋より新翻經論六千卷を將來刊行した。大覺國師文集には「寄日本國諸法師求集致藏疏」と題する書狀が收められてをり、これによると、彼は日本の僧侶達にまでも呼びかけて諸經藏疏の蒐集刊行に努めてをり、高麗佛敎の興隆に盡したのみならず、佛敎を通じての日宋麗三國の提携に貢獻してゐるのである。従つてこの後日本の僧侶等の高麗に渡るものも現はれた。たとへば文宗三十年（一〇七六）には、文宗の長壽を祝するために膨んだ佛像の献納を乞ひ、入京を許された僧侶二十五人の日本人があつた。また高宗三年二月にも高麗佛敎に慣れて渡麗した日本僧侶もあつた。（高麗史）

かくして十一世紀の後半期は、高麗・宋共に前後を通じて最も平和にして且つ國富み文化榮へた最盛期であり、半島へ向つた日本の商船を受け容れるのには最も好適な條件が整つてゐた。

一方またこの十一世紀の後半期は、日本では丁度白河天皇の治世下であり、それは貴族政治の絶頂期に當つてをり、これから院政期に入らうとする過渡期であつた。そしてこの頃になると最早や中央集權的律令制度の崩壞は加速度的となり、全國的に公領は續々莊園化していつた。またこのやうに全國が莊園化への過程を急ぐと共に、莊園内の農業生産力の發達は、莊園をその物質的基盤とする貴族階級の政權をも支持したのである。そして貴族階級の日常生活は、莊園より得られた經濟力によつて華美風流に流れたのである。彼等の生活が向上し、華美の風潮が盛んになれば、そこに必然の結果として海外の珍貨に對する欲求が熾烈とな

つて來るのはいふまでもない。

このやうな貴族階級の熾烈なる欲求に應へるが如く、宋の商船は十一世紀に入つて頻繁に來航し、特に白河天皇の一代十四年間（一〇七二——一〇八五）には殆ど毎年の如くに來航した。しかもこの一代は既に述べたやうに北宋の神宗の時代に當り、神宗は國民に對し太平を粉飾し、且つまた貿易を獎勵する目的を以て日本にも宋の商船に託して入貢を勧誘する國書を送つて來た。その回数には十四年間に十回程にも及んでをり、當時の政治家達もその頻繁なのに驚き且つ怪んだのである。（拙文「日宋交通に於ける發展的契機」史學雜誌四三ノ一〇）

五 日宋貿易の連鎖關係

日本人が高麗史上にその姿を現すやうになつたのは、穆宗二年（九九九）日本人道要彌刀等二十戸が高麗に歸化を乞うたとあるのがその最初である。そしてその後も或は歸化を乞うものの記事等見られるが、明かに日本商船の高麗へ赴いたと見られるものは、文宗二十七年（一〇七二）七月、日本人王則貞・松永等四十二人が高麗東南海都部署を通じて國王に對し螺鈿鞍轡・刀・鏡匣・硯箱・櫛・書案・畫屏・香爐・弓箭・水銀・螺甲等の進献を請ひ、海路入京を許されたとあるのが初見である。王則貞は姓よりすれば恐らく日本に居留した宋商乃至はその子孫であつたらう。しかし高麗史にも日本人と記してをり、日本側の史料にも大宰府商人と記してゐるところを見れば、最早日本に歸化してしまつたものと見るべきであり、従つて高麗に赴

いた日本商人の初見として異存がないであらう。(帥記・水左記承暦四年閏八月・本朝續文粹十一) 況してこの時松永といふ日本人も同行してゐるのであるから尙ほ更である。その後文宗の卒するまで九年程の間に日本商船の高麗に赴いたもの五回、また文宗の次の宣宗の時代七年間にも五回を數へてゐるのである。しかも尙ほこのほかに高麗史に洩れたものもあつたことは、承暦四年(一〇八〇)前記大宰府商人王則貞が高麗國禮賓省より、高麗王文宗の病氣を治療すべき名醫を日本政府に求めるための公式依頼狀と贈物とを託されて歸つた事件は、日本側の史料には見えてゐるが、高麗側の史料である高麗史には洩れてをつて全然缺如してゐる一例からも察せられるのである。九條伊通はその著「大槐秘抄」に於て

鎮西は敵國の人けふいまにあつまる國なり。日本の人は對馬の國人高麗にこそ渡候なれ。其も宋人の日本に渡る體にはぬかたにて、希有の商人のただわづかに物もちてわたるにこそ候めれ。しかれば制は候事なり。

といつてゐるが、これは伊通が中央に在つて大宰府の實情に暗く、依然として延喜以來の制が嚴存して、我が國人の海外渡航が禁止されてゐたと考へてゐたからにほかならない。これは唯に伊通獨りに限らず、一般貴族は皆認識不足だつたのであつて、前述の承暦四年高麗王求醫問題審議の席に於て關白師實が「王則貞のやうに高麗に往復する商人が外かにもあるか」といふ質問を發したところ、皇太后宮權太夫師成が「甚多候也」と答へてゐることによつても推測されるのである。(帥記承暦四年九月四日條) しかもまたこのことは高麗側の高麗史によつて實證されてゐることは既に述べた如くである。かくして高麗朝を通じ、日本との公

的關係は遂に開かれなかつたけれども、日本商船の高麗への進出によつて民間交通が成立した。そしてこの民間交通に活躍した日本商人は大宰府(博多)商人・壹岐・對馬・薩摩等の莊園關係の人々であつた。殊に大宰府商人の活動が他を抜いてゐたことは今昔物語等によつて物語られてゐるのである。(今昔物語集三十一)次にしからは當時日本より高麗へ輸出された輸出品は如何なものであつたか。今高麗史・宣和奉使高麗圖經等に散見する零細な史料を拾ひ集め且つ綜合して見ると、

水銀 硫黄 眞珠 法螺 螺 甲 杉材

等の原料品のほかに

螺鈿鞍 鏡匣 硯箱 書案 香爐 扇子

等の美術品が輸出され、特に扇子には大和繪が描れてをて非常に喜ばれたことは宣和奉使高麗圖經によつて知ることが出来る。そのほか、

刀劍 弓箭 甲冑

等の武器も輸出され、時には對馬の牛馬等も齎されてゐる。

次にこれを大陸側へ輸出された輸出品と比較してみると、大陸へは細色としては、

金子 砂金 眞珠 水銀 鹿耳 茯苓

蠶色としては、

硫黄 螺頭 合簞 松栢 羅板

がある。このほか美術工藝品には、

金銀蒔繪箱 金銀蒔繪硯箱 螺鈿梳函 螺鈿書案 螺鈿書几 螺鈿鞍轡 鹿皮籠

染皮（色皮） 銅鐵鍍 倭畫屏風 扇子 鏤金 銅器

等であり、此等の製法は皆大陸の追隨を許さず、殊に螺鈿の精巧と日本扇の華麗には大陸の人々はその歎賞を惜まなかつたのである。また日本刀もその精銳犀利にして且つ美裝されてゐる点で大陸の諸人達の賞讃を買つてゐる。（拙文「日宋交通に於ける我が能動的貿易の展開」史學雜誌四五ノ三）

そこで次に半島向け輸出品と大陸向け輸出品とを比較して見ると、

水銀 硫黄 眞珠 法螺 螺甲 金銀蒔繪 螺鈿 刀 扇子 木材

等その主なものは共通してゐる。そして扇子の如き美術品、特にそれに描かれた大和繪の典雅さに對しては宋も高麗も期せずして讚歎してゐるのである。唯鹿耳・茯苓等の類、美術工藝品では銅器・合簾などが大陸への輸出品に加へられてゐてしかも半島向け輸出品に見えないのは、高麗自身此等のものを産し、しかもこれを宋へ輸出してゐるからである。

次に轉じて宋麗貿易に於ける貿易品を眺めて見ると、宋より高麗へ輸出される物貨は、

香料類 水銀 龍齒 沒藥 大蘇木 犀角 象牙 鸚鵡 孔雀
異花 珍翫 書籍 五色纈絹

等である。即ち南海産の珍貨や、自國製品類であつた。（寶慶四明六志）このほか南宋になると銅錢類も高

麗へ流出した。これを宋より日本へ輸出された物質と比較して見ると、宋より日本へは、新猿樂記によると
 波香 麝香 衣比 丁子 甘松 薰陸 青木 龍腦 鷄舌
 白檀 赤木 紫檀 蘇芳 陶砂 紅雪 紫雪 金益丹 紫金膏
 巴豆 雄黃 可梨勒 檳榔子 銅黃 綠青 燕紫 空青 丹朱砂
 胡粉 豹虎皮 藤 茶碗 籠子 犀生角 水牛如意 瑪瑙帶 瑠璃壺
 綾錦羅縠 吳竹 甘竹 吹玉
 と見えてゐる。このほかにも書籍・木綿・孔雀・鸚鵡・唐鶴・文房具・砂糖・玩具類等が輸入されてをり、
 (拙著「日宋貿易の研究」第三編第一章) 高麗と同じく十二世紀の頃より宋銅錢が輸入されるやうになつた。以上によつて明かなやうに日本向け大陸物貨と高麗向け大陸物貨との共通品は、

香料類 藥品 蘇芳 犀角 鸚鵡 孔雀 綾錦 書籍 珍翫
 銅錢

等であり、大陸輸出品の主なるものが日本・高麗兩方面に輸出されてゐることが知られる。そして高麗向け大陸輸出品中特に注目すべきは水銀である。水銀は日本より宋・高麗へ向けて輸出された主要輸出品の一つであり、それが宋へ多量に輸出されたであらうことは、延久四年(一〇七二)廣州商人會聚が硫黃・水銀購入のため我が國に來航したといふ一例によつても窺はれるのである。(參天台五臺山記延久四年六月五日)しかるに日本より盛んに宋へ輸出されてゐた水銀が、宋の商人の手によつて更に高麗へ轉賣されてゐた、つ

まり中繼貿易されてゐたことが推測されるのである。しかも北宋の神宗より以後、日本・高麗向け貿易船の發着港は明州一港と限られ、日本・高麗の商船も亦明州へ入港してをつたのであるから、高麗・日本の輸出品は明州に輻輳し、高麗・日本向け輸出品は明州より積出されてをつたといふ實情は益々この推測を可能にしてゐるのである。

次に高麗より宋へ輸出した物貨の中には螺頭・螺鈿が見えてゐる。ところが螺鈿は日本の螺鈿が有名であつて、宋では螺鈿器は本と日本から産し、その物象百態が頗る精巧であつて、一般市場で見かける賣品などとても及ばないと激賞してをるのであつて、(泊宅編)日本から高麗へも盛んに輸出されてゐるのである。して見ると、日本より高麗へ輸出された螺鈿は、更に高麗より大陸へ轉賣されてゐたことが推測されるのである。このやうなことは獨り螺鈿の場合のみに限らず、高麗が盛んに日本より輸入してをつた硫黃が屢々宋朝への貢進物の中に加へられてをり、(宋會要稿蕃夷歷代朝貢天聖八年十二月十三日・熙寧四年八月一日)また時には日本の車が宋朝に獻せられ、(文昌雜錄四)或はまた高麗國使が日本扇を宋人達への手土産とし、(圖書見聞誌十七)明朝に至つては、高麗は遂にこれを模造して明朝に貢獻するやうになつた。(陔餘叢考三三摺扇)

以上の例よりすれば、宋・高麗共に日本より輸入した貨物の或る物を互に相互交流してゐることが知られるのである。

最後にしからは高麗より日本へ何を輸出したか、高麗に往いた日本商船が見返り物資として何を積み歸つ

たか。これに關する史料は甚だ貧弱である。唯高麗より宋へ輸出した高麗特産物と大體共通のもの、特に

人參 麝香 紅花

等が齎らされたであらうことが推測される。それと同時にまた宋より高麗に輸出された大陸の物貨が高麗より更に日本に轉賣輸出されたであらうことが推測される。といふのは承曆四年大宰府商人王則貞が高麗より日本の名醫招聘の件を委託された際、高麗側の進物として日本政府に進めたものは、高麗産の麝香と宋より高麗に輸出してをつた華錦・大綾・中綾とであつたこと、或は釋論疏鈔が宋より高麗に齎らされ、更にそれが高麗より日本に輸入された例（東寺金剛藏聖教目錄十四）などによつて推測されるのである。

つまり高麗を中繼地として日宋間に商品の交流が行はれてをつたのである。そしてこのやうな日宋麗間の連鎖關係は、上來眺めて來た三國の好ましい國內情勢と國際關係とを基盤として成立したものであることは、
いまでもなす。

六 連鎖關係の崩壞

日宋麗三國の連鎖關係は三國の内外諸條件の一致といふ基盤に立脚して成立したのであるから、若しこの條件に變化が生じて來れば、連鎖關係は崩れてしまうものなのであつた。

果してこの連鎖關係は一世紀も保たず、十二世紀に起つた三國內外情勢の變化によつて急速に崩壞していつたのである。といふのは遼の支配下に在つた女眞の酋長阿骨打が目立し、一一二五年遂に遼を滅して金と

號し、ついで北宋を滅ぼしたので、宋は南渡して南宋となつた。大陸のこの政治的變動を見た高麗は早速金に朝貢してその正朔を受けたのである。これはいふまでもなく自己保全のため宋に朝貢してその正朔を受けると同時に、一方ではまた遼(契丹)に朝貢してその正朔を受けるといふ所謂首鼠兩端を持する傳統的政策より出たものである。そしてこの政策を維持するためには、時に宋朝へ進める表奏に誤つて遼の年號を記し、宋朝より却下されてその面目を失つたといふ笑ふべき失策をも犯したことさへあるのである。(高麗史宣宗九年八月乙丑)

この高麗の態度に對しては、宋朝側の有識者達によつて夙より痛烈な批判が下されて來た。たとへば熙寧年間高麗國使が宋都汴京に至つた時、知開封府元絳を介して王安國に歌詩を求めたところ、王安國は詩の中に「豈意諸仙來鳳沼、爲傳賈客過雞林」と詩に託して高麗使節を賈客と諷刺してゐるのである。(東軒筆錄卷八)また元祐四年(一〇八九)龍圖閣學士朝奉郎知杭州蘇軾が、泉州商人徐戩が高麗國より、高麗王文宗の第四子大覺國師義天が杭州慧因院の淨源閣梨を祭るために作つた祭文を宋に届ける使命を帯びた義天の從僧壽介等五人をその船に乗せて杭州に到着した事件を狀奏した狀奏文中に、高麗使節入朝によつて生ずる利害得失にまでも論及し、

高麗使節が入朝すれば、これに對する館待賜予の費用が莫大である上に、その入京路の兩浙・淮南・京東の三路は、築城・造船・亭館建設のために農工を調發し、商賈を侵漁するので、此等の地方は物情騷然たるものがあり、公私共にその負擔に堪へない。しかも宋朝は高麗使節の入朝によつては何等得るところが

ない。これに反して高麗使節は至るところの山川を圖畫し、書籍を購入し、宋朝より莫大な賜予を獲得してしまふ。次に契丹はその虚實は明かにし難いが、しかし契丹の一舉首一投足は高麗の運命を左右するに足るものであるから、兩者の間には何等かの陰謀・提携があるものと見なければならぬ。またそれあるが故に公然と入朝して來るのに相違ない。故に宜しく高麗の入朝を拒絶すべきである。

といふ意見を具進し、(歷代名臣奏議三四六夷狄) 次いで元祐八年(一〇九三)にも、入朝した高麗使節が宋の貴重な書籍をその本國に持ち去ることに對して利害を論じた劄子に於ても同様な主旨に基づいて、高麗使節入朝の不可なる所以を核論してゐるのである。(歷代名臣奏議三四六・國朝諸臣奏議一四一)

また元祐年間蘇轍も同様の論調を以て高麗使節入朝の不利を論じてゐる。(歷代名臣奏議三四六夷狄) また更に下つて靖康元年(一一二六)には、侍御史胡舜陟も「論高麗人使所過州縣之擾」といふ狀奏を欽宗に進め、

高麗は政和年間以來五十餘年の間、毎歳の如くに入貢するので、その入京路に當る淮浙の人々はその煩に堪へないのである。沿道州縣の官私の舡は盡く高麗使節のために徵發され、村保の攄舟は一縣につき數百人を徵用される。そのため農鑿期には百姓の仕事は盡く廢止されてしまふし、州縣の前期勾集の保丁はそのため凍餓するものが多い。また沿流の亭館・寺觀を悉く陳設するために、その費用は皆民に課せられ、しかもその督促は急であつて、官吏は鞭笞を以てこれに臨む。故に淮浙の人々は、高麗の使節一度通過すれば遂に遭ふよりも甚しいといつてゐる。高麗が朝廷に貢獻するところのものは皆無用の玩物であり、朝

廷が高麗の入朝のために費すところの帑藏は民の膏血である。近歳賜予の費えは幾許に上るか測り知れないのである。一路の饋遺燕勞費だけでも數十万緡に上る。高麗人は利を貪るために屢々入朝するのであつて、國を蝨し民を害するものである。

しかも高麗は昔は契丹に臣事し、今は金に臣事してゐる。契丹・金は高麗の死命を制することが出来るが、我が國は彼を如何ともすることが出来ない。従つて彼は契丹・金を畏れてゐるが我が國を畏れない。聞くところによれば我が國より得るところの賜予は契丹・金と分ち合ひ、我が國の山川の形勢や兵旅の衆寡、財用の虚實を探つてこれを契丹・金に通報してゐるといふことである。故にその入朝はただに費用莫大であるばかりではなく、實に虎を養つて患を遺すやうなものである。

若し既に高麗の使が明州に到着してゐるのであるならば、州をしてその表奏のみ朝廷に進めさせ、使は其處より還すべきである。高麗人の入貢は國や民にとつては害があり、得するものは州縣の賦吏・小人のみである。今や政治一新の際、宜しくかくの如き弊事は悉く革むべきである。

と論じてゐる。(歷代名臣奏議三四六夷狄)

要するに北宋時代高麗使節の入朝に際しては、彼等は明州に上陸し、そこより大運河によつて宋都に至つたので、北宋の運命旦夕に迫つた際とて、沿道人民の疲勞困憊、國庫の負擔甚大と、北敵に對する軍備事情の漏洩等の問題が切實に痛感され、このやうな利害得失論となつたものであらう。

かくして高麗使節の入貢に對しては、既に北宋の頃より非難の聲があがり、しかもその聲は次第に高まり

つつあつたのである。がそれにも拘らず依然として高麗の入朝を許可してをつたのは、北宋時代はその入朝を許すことによつて太平を粉飾して人民の眼を眩惑し、併せて契丹を挾撃乃至牽制しようと企てたものであり、(歴代名臣奏議三四六元祐中蘇轍狀奏)南宋時代に下つては、高麗と通交することによつて敵國金の情勢を探り、併せて貿易の利潤を收めて窮乏化しつた國庫の收入を補はうとする意圖があつたからに相違ない。この間の消息は高宗の時迪功郎劉壺等を高麗へ派遣しようとする企圖が起つた際、西浙四路安撫使戸部侍郎葉夢得が「論金人」といふ劄子に述べたところによつて明瞭である。次に彼の論旨を掲げよう。

所部の浙西・浙東路は海道に連り、高麗とは海を隔ててをり、金との國境からも餘り遠くはない。金は東南より我が國を窺はうとしてゐるとのことである。若しも北の方登萊からか、または東高麗に道を假りて、海路二浙を襲つて來るならば、遠くて二十日、近ければ五七日で襲來するであらう。實に恐るべきことである。

ところで本州の商船は舊くから高麗へ往來貿易して來たので、その海道や高麗の山川形勢に通じてゐるものがある。そこで舶主張緩に命じて商人柳悅・黃師義の二人を招き質問して見た。

この二人は泉州の出身で、本州より公憑を給せられ、毎年一再高麗へ買販に赴いてをり、高麗の事情にも通じてゐる。その言ふところによれば、「金はもと毎年使を高麗に遣して進奉してゐた。崇寧三年(一一〇四)はじめて高麗と國境の地を争ひ絶交した。政和五年(一一一五)契丹が金のために敗られた。宣和七年(一一二五)高麗が使を遣し好を求めたところ、金は使を留めて歸さなかつた。昨年金は我が畿甸

を獲して後、高麗遂に金に臣禮をとるに至つた。しかし金は高麗の宮室を焚いたので、高麗は以前程盛んではなく、別都に難を避けてゐる。金の領土は契丹の傍海六十餘州で皆荒陋單弊、その地は高麗と鴨綠江を隔ててゐる。河は毎冬厚い氷に閉ざされる」と語つた。以上の如くこの二人は高麗へ往來し、高麗に久しく留つたこともあり、高麗人の言葉をよく探り聴くことが出来る。そこでこの二人を權りに承信郎に任命し、平年通り高麗へ貿易に赴かせ、同時に賊情を探らせ、それによつて豫め敵に備へたならば敵の謀略を挫き得るであらう。公けの使節は遣すのもよいが、それよりもこの二人を密に遣して敵情を探る方が有利である。

といつてゐるのである。(歷代名臣奏議三四八夷狄)しかるにその後十三世紀に至り、蒙古興つて金を滅ぼし、更に高麗を征服するに及んで宋麗公的關係は遂に終焉を告げるに至つた。

一方またその終極の目的は大陸との直接貿易にありながら、造船術・航海術等の技術の拙劣と海洋の自然的條件とに制約されて、先づその發展を高麗へと方向づけられた日本商船は、次第にその技術が進歩するに従ひ、半島より轉じて大陸方面へとその活動の方向を轉開して行つた。殊にこの傾向を決定的にしたものは、十一世紀最末期より十二世紀の前半期にかけて次第に深刻化して來た高麗の政治的腐敗である。

即ち中央では軍閥跋扈して國王の廢立が行はれ、地方は治安紊れて叛亂・盜賊相次いで蜂起した。今その主なものを列擧すると、獻宗元年(一〇九五)李資義の謀亂、仁宗三年(一一二五)内侍祇候金榮及び將軍等の朝鮮國公李資謙誅殺險謀、李資謙貶謫事件、同六年(一一二八)南界海賊の蜂起、同十三年(一一三五)

西京（平壤）の兵變、毅宗二十四年（一一七〇）李義方の國王廢立、明宗三年（一一七三）東北面兵馬使金甫の李義方誅殺・前王擁立陰謀、同四年（一一七四）より數年にわたる西京留守趙位寵の叛亂、同五年（一一七五）より二十數年にわたる南京（揚州）賊徒の擾亂、神宗五年（一一〇二）慶州・永州の紛争、熙宗七年（一一二一）崔忠獻の國王廢立等である。（高麗史世家）

この高麗國內の叛亂・動搖・治安紊亂の結果、たとへば宣宗十年（一〇九三）日本人十九人・宋人十二人乗り組み、弓箭・刀劍・甲冑・水銀・眞珠・硫黃・法螺等の日本の輸出品を積んだ商船が、高麗邊鄙を侵す海賊と見做され、安西都護府管轄下の延平島巡檢軍のために捕へられ、貨物は沒收され、乗組員は嶺外に配流された例に於て見られる如く、高麗に赴いた日本商船も時とすると高麗國內動搖の捲添へを喰つて海賊と間違へられたり、抑留されたりするやうなことも起つて來た。従つて日本商船はこのやうな不安且つ危険な高麗方面を去つて、直接大陸へ渡航するやうになつて來たのである。

しかしその後と雖も全然高麗に日本商船の姿は見えなくなつてしまつたわけではない。極く小數ながらも高麗へ渡航するものもあつた。唯一般的にいつて、たまたま高麗方面に姿を現はす日本商船があつても、それは宋への往復の途中、風浪や潮流に押し流されてやむなく高麗に漂着してしまつたものか、さもなければ高麗國內の不安動搖に乗じて高麗沿岸を略奪した肥前松浦黨や壹岐・對馬等の海賊の類に過ぎなかつたのである。

高麗史にはじめて「倭寇す」といふ記事が現はれて來るのは、蒙古の勢力が漸く半島を脅すやうになり、

殊に高麗に使した蒙古の使が歸國の途中盜難に遭つて横死したため、蒙古は遂に高麗と斷交するに至つた物情頗る騷然たる高宗十二年（一二二五）の四月、倭船二艘慶尙道沿海州縣に寇し、悉く擒へられたとあるのが初見で、それより以後次第に頻繁になつて來るのである。また宋商船の高麗への渡航も高宗十六年（一二一九）宋商都綱金仁美等が濟州漂流民二十八人を伴つて來航した記事を最後として、蒙古勢力の高麗蝕侵のために高麗史上より全く姿を消してゐる。

かくて十二世紀の後半期、日本商船の技術的段階と海洋の自然的條件による制約、及び日宋麗三國の内外諸情勢の最適條件等的一致によつて成立した日宋麗連鎖關係は、十二世紀に入つて、高麗國內情勢の變化と日本商船の技術的進歩とによつて次第に崩壊し、更に十三世紀に入り、蒙古の勃興による國際情勢の變化は、この三國の連鎖關係の上に完全に終止符を打つに至つたのである。